

ヘルダーリンのボルドー紀行

高 木 昌 史

旅程図

往路／帰路

目次

プロローグ

1 「アポロンに撃たれる」

2 南仏の「追想」

3 賛歌断片

4 風、鳥そして海

エピローグ

註

旅程図

往路 1801年12月10日頃～1802年1月下旬

ニュルティンゲン—ストラスブール—リヨン—クレルモンフェラン—リ
モージュ—ペリグー—ボルドー

帰路 1802年5月下旬～1802年6月下旬

ボルドー—アングレーム—ポワティエ—ブロー—オルレアン—フォンテ
—ヌブロー—パリ—ストラスブール—ニュルティンゲン

プロローグ

本稿の目的は、旅がいかに多くをもたらすかを実証することにある。こ
こではドイツの詩人フリードリヒ・ヘルダーリンが試みた南フランス、ボルド
ーへの紀行を扱う。

ところで、ヘルダーリン(1770-1843年)ほど、今日まで、思想家や哲学者の関心を惹いてきた詩人も珍しい。ドイツ語圏では、フリードリヒ・ニーチエ⁽¹⁾、ヴィルヘルム・ディルタイ⁽²⁾、マルティン・ハイデガー⁽³⁾、カール・ヤスパース⁽⁴⁾、ヴァルター・ベンヤミン⁽⁵⁾、テオドーア・W・アドルノ⁽⁶⁾、そしてフランス語圏ではミシェル・フーコー⁽⁷⁾、ジャック・デリダ⁽⁸⁾、等々、時代をリードする重要人物が^{こぞ}挙ってこの詩人に力のこもったオマージュを捧げている。中でも、ハイデガーのヘルダーリン論は解釈史に一時代を画し、久しくその影響をとどめ、その記憶はいまだ新しい。

さて、ヘルダーリンは1801年12月、新たな家庭教師職に就くために、南フランスのボルドーに向かった⁽⁹⁾。そしてその旅を境に、彼の作品は大きな転機を迎えた。この事実がいち早く注目したのは前述のハイデガーとベンヤミンであった。

ハイデガーは1934/35年の冬学期に、フライブルク大学で、ヘルダーリンの賛歌『ゲルマニア』Germanienと『ライン河』Der Rheinを講義し⁽¹⁰⁾、その後1941/42年の冬学期には『追想』Andenken⁽¹¹⁾を、そして1942年の夏学期は『イスター』Ister(=ドナウ河)を講義して⁽¹²⁾、1943年、名著『ヘルダーリンの詩の解明』Erläuterungen zu Hölderlins Dichtungを刊行した⁽¹³⁾。

一方、ベンヤミンは歴史批判版『ヘルダーリン全集』六巻、Hölderlin, Sämtliche Werke, 1913-1916を刊行したノルベルト・フォン・ヘリングラート⁽¹⁴⁾の影響下に、「フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩』Zwei Gedichte von Friedrich Hölderlin⁽¹⁵⁾を1914/15年に発表し、1936年にはドイツ作家の書簡アンソロジー『ドイツの人々』Deutsche Menschen⁽¹⁶⁾を刊行した。その中で彼はヘルダーリンがそのボルドー体験を綴ったペーレンドルフ宛書

簡を紹介し、興味深いコメントをそれに付した。

二十世紀を代表するこの二人の思想家はいずれも、彼らが愛してやまない詩人ヘルダーリンの南フランス体験を重視し、何か決定的なものをそこに読み取ろうとした（後述）。そして注目すべきことに、ごく最近、ヘルダーリン研究者も、1802年の南仏滞在がこの詩人に与えた「全体的体験」*Totalerfahrung* は彼の創作活動の「最も本質的な中間休止」⁽¹⁷⁾を形成するという、きわめて衝撃的なテーゼを打ち出した（『ヘルダーリン年鑑』1994 / 95年、G・ミート論文）⁽¹⁸⁾。実際、この年を境に、ヘルダーリンの作品ではそれまでとは異質な何かが始まる。独特な強靱さと深みが詩語から沸き上がり、読者は思わず知らず、とりわけ感性的な次元で、一種の戸惑いを覚えるのである。

本稿では、ハイデガーとベンヤミンが道を拓き、最近の研究者も注目するヘルダーリンのボルドー体験について、いくつか考察を試みる。

1 「アポロンに撃たれる」

ヘルダーリンが新たな戦に就くため、故郷ニュルティンゲンから南フランスのボルドーへ向けて出発したのは1801年12月のことだった⁽¹⁹⁾。それ以前、やはり家庭教師としてスイスに滞在した時期（1801年1月～1801年4月）を除けば、外国に行ったことがなかった彼にとって、言葉（フランス語）も風土（南方）も社会的状況（革命とその後）もまったく異なる遠い国へ旅することは、決定的な体験となったようだ。まずはヘルダーリン自身の声に耳を傾けてみたい。

「君に久しく手紙を書かなかった。その間、私はフランスにいて、悲しく孤独な大地を見てきた。南フランスの羊飼いといくつかの美しい風景、愛国的な疑念と空腹の不安に駆られて育った男と女を見てきた。

強力な元素、天空の火、人々の静けさ、自然の只中での彼らの生活、そして彼らの制約と満足がずっと私の心を捉えて離さなかった。英雄に倣って言うなら、私は『アポロンに撃たれた』と言ってよいかも知れない。

ヴァンデでは、野性的で戦士的なもの、純粋に男性的なものが私の興味を惹いた。生命の光が直接、眼と四肢に宿り、死を感じるときでも、男性的なものは卓越した己を感じ、知への渴望を満たす。

古典古代の精神の廃墟の中に暮らす南国の人々の筋骨の逞しさは、ギリシア人の本質を私によく分かせてくれた。私はギリシア人の性格と知恵、彼らの肉体、彼らとその風土の中で育った仕方、また彼らが元素の力に抗して、高揚する創造精神ゲーニウスを守ったその法則を知った。」(パーレンドルフ宛書簡)⁽²⁰⁾

青春時代から古代ギリシアの世界に憧れ、ホメーロスやピンダロスやソポクレスのテキストに親しんだヘルダーリンは、今、三十歳を超えて、生まれて初めて南方的なものに触れ、その「本質」を知る。「孤独な大地」「天空の火」、そこに生きる人々の「制約」と「逞しさ」。南フランスの自然は、北国の詩人にギリシアを想像体験させ、南方的なものの内的法則（「天空の火」と「制約」の均衡）を示したのである⁽²¹⁾。

ベンヤミンはこの書簡についてこう語る。「ヘルダーリンの手紙は今や、後期の賛歌を支配している言葉に満ちている。故郷、ギリシア、大地と天空、国民性、満足。言葉というむき出しの岩石が険しい高みで陽光を浴びている。

そこでは、三角測量の旗のように、言葉が『最高のしるし』となる。これらの言葉によって、ヘルダーリンは国と土地を測量する。『心の危機と食料の危機』ゆえに、色々な国や土地が、彼の眼前にギリシアの地方のように見える。その風景は花咲く理想的国土ではなく、野性的な現実の国土である。西洋、とりわけドイツの国民とギリシアが苦悩を共有していること、それこそがギリシア精神の歴史的な変化、全実体変化 Transsubstantiation の秘密なのであり、ヘルダーリンの晩年の賛歌が対象としているのはまさしくそれなのだ。(22)

太陽の光が次第に強くなる南フランスの春の風景の只中で、ヘルダーリンはギリシア的なものの本質、^{エレメント}元素の熱気と人間の静けさとの一種独特の共存を実感する。ボルドーに旅立つ前、詩人が同じくベーレンドルフに宛てた手紙に言うところの「天空の火」das Feuer vom Himmel と「ユーノのような冷静さ」die Junonische Nüchternheit の均衡ある共存である (23)。ルネサンス以来、西欧人が伝統的に思い描いてきたギリシアの理想郷アルカディア (24) のイメージには程遠く、荒涼とした風光の中で、詩人は「アポロンに撃たれる」かのような衝撃を受ける。

フランスのゲルマニスト、ピエール・バルトーはアイロニカルかつ冷静に、「書簡」のこの表現に「文体上の自由」を読み取るのだが (25)、われわれはむしろ、J・シュミットの注釈に拠って (26)、ヘルダーリン自身が「英雄に倣うと言うなら」という表現で脳裏に描いていたにちがいないギリシア古典をここで確認しておきたい。

ホメーロスの『イーリアス』(第十六書)では、ギリシアの英雄の最期が次のように歌われる。「折しも、…、パトロクロスよ、御身の寿命のきわみが見えた。すなわち御身へポイボス神が、激しい合戦の間に立ち向かわれて

…」(呉茂一訳)⁽²⁷⁾。パトロクロスは、賛歌『ムネーモシユネー』の中でヘルダーリンが歌った、英雄アキレウスの親友であり、ポイボス神はアポロンの異名である。

ソポクレスの悲劇『オイディプス王』(ヘルダーリンの独訳がある)⁽²⁸⁾。ここでは、主人公オイディプス王が自分の両眼をつぶした後、こう語る。「こうなったのはアポロンのため、親しき友らよ。…こんな苦しい受難の運命をもたらしたのは」(藤沢令夫訳)⁽²⁹⁾。

パトロクロス、オイディプス王、いずれもギリシア神話の光の神アポロンにまさに「撃たれた」のである。ベルトーが指摘するように、ヘルダーリンの手紙に文学的修辭があるとしても、生まれて初めて南国を体験した北方詩人が、風土の異質性を強烈に肌で感じ取ったであろうことを疑う理由はない。詩人の言葉には、感性の声がどこかで響いているはずである。事実、後に見るように、ボルドー以後のヘルダーリンの作品からは、この感性の声が明瞭に聞き取れる。

2 南仏の「追想」

ボルドー紀行の様子をここで改めて振り返っておきたい。

ハンブルク領事でボルドー在住の葡萄酒業者ダニエル・クリストフ・マイヤーの館に家庭教師として赴任するために、ヘルダーリンは1801年12月、故郷ニュルティンゲンを出発した。どのようなコースを通過して、同年1月下旬、彼はボルドーに到着したのか。残念ながらその詳細は今日なお不明である。ただ、往路はストラズブルで、おそらくフランス国内の政情ゆえに、半月ほど足止めされた後、パリではなくリヨン経由で目的地に向かったこと

は、当局の記録から明らかになっている⁽³⁰⁾。アドルフ・ベックや前記ベルトーなどの調査研究から、詩人が本稿冒頭に掲げたコースを辿ったことはほぼ間違いないようである⁽³¹⁾。いずれにせよ、母宛の手紙に見るように、彼は雪のオーヴェルニュ山岳地帯を通って、一路ボルドーを目指したのである⁽³²⁾。

約三か月半ボルドーに滞在した後、ヘルダーリンは帰路、パリ経由で祖国ドイツに向かう。この場合も、詳しいコースはやはり分かっていない。冒頭に掲げたコースをおそらく経由したであろうと推測されている⁽³³⁾。マイヤー家での仕事は何ゆえ短期間に終わったのか、何ゆえ彼が故郷ニュルティンゲンに憔悴した姿で戻ってきたのか⁽³⁴⁾、多くは現在も謎に包まれている。ただ、興味深いのは、往路リヨンの通関記録の「職業」profession 欄に彼が「作家」homme de lettre と記入しているのに対して、帰路ボルドーでは、「教師」instituteur と書いていることだ。これは様々な憶測を呼ぶが、やはり憶測の域は出ない⁽³⁵⁾。ともあれ、リヨンの記録によれば、当時のヘルダーリンは、(以下、[] は書式欄) [年齢] 32 [歳], [身長 1 メートル] 766 [ミリメートル], [毛髪と眉] 栗色, [目] 茶色, [鼻] 普通, [口] 小, [顎] 丸, [額] 高, [顔] 卵型, の人物であった。

伝記的な事柄に不明な点は多いものの、ヘルダーリンは何と言っても後世に作品を残した。読者の想像力を雄大に飛翔させる美しい余韻に満ちた詩を。南フランスを描く作品『追想』Andenken を読んでみたい。

北東の風が吹く、／風の中でも私には最も好ましい風が、／なぜなら、それは火の精神を／よき航海を船人に約束してくれるから。／しかし今は行け、そして挨拶を送れ／美しいガロンヌ河に、／それにボルドーの庭々に／その急峻な岸辺には／小道が通り、河流には／深々と小川が流れ落ち、その上で

は／高貴な樹木の一对が覗き込んでいる／檜の木と白楊が。

私には今もよく思い浮かぶ／広い樹冠を水車小屋に／傾ける楡の森の様子
が、／農家の庭には無花果の木が育っている。／祭りの日々／褐色の肌の女
たちがそこを歩む／絹のごとき大地の上を、／三月の頃、／夜と昼が相半ば
するときに、／緩やかな小道を、／金色の夢にももの憂くなって、／眠りを誘
うそよ風が吹いてゆく。

だが、差し出してくれ、／暗い光に満ちた、／芳香を放つ杯を、／私が安
らぐことができるように。なぜなら／暗い影の下の微睡^{まどろみ}みは甘美であろうか
ら。／良いことではない、／魂を失って死すべき運命に思いを馳せるのは。
好ましいのは／ひとつの会話、それに心の／思いを語ること、多くを聞くこ
と／愛の日々のこと、／行われた行為のことを。

しかし何^{いずこ}掬へいったのか、友らは？ベラルミンと／その仲間たちは？／源
泉に赴くことに畏れを抱く者もある。／富みが始まるのは／海だ。彼らは／
画家たちのように、地上の美を／拾い集め、帆に翼を張って戦うことも怖れ
ない、／孤独に、久しく、帆のないマストの下に／暮らすことも。そこでは
夜、町の祝祭の日々の／輝きもなく、／弦の調べも、伝統の舞踏もない。

しかし今、インド人のもとへ／男子らは向かった、／風吹く岬の／葡萄の
山から／ドルドーニュ河が流れ落ち、／壮麗なるガロンヌ河と合流して／
広々とその海へ／河は流れ出る。だが、海は／記憶を奪い、また与える、／
愛もまたひたすらに視線を繋ぎ止める、／しかし留まるものを打ち立てるは
詩人たちだ。⁽³⁶⁾ (原詩は「付録」参照)

『追想』の魅力に強く惹かれたハイデガーは、前述したように、1941 / 42
年の冬学期、この詩について講義し、翌 1943 年には改稿案を『ヘルダーリ

ンの詩の解明』に収録し刊行した。講義は全 65 節からなる膨大なものであるが⁽³⁷⁾、『解明』稿は手を加え短縮されている⁽³⁸⁾。ハイデガーは詩論を展開するに当たって、ヘルダーリンのテキストから二つの典拠を取り出している。ポルドーに旅立つ前、1801 年 12 月 4 日、バーレンドルフに宛てた詩人の手紙と、悲歌『パンと葡萄酒』Brod und Wein (1801 / 02 年作) の異文^{ヴァリエント}である。前者の手紙に拠ると、ドイツ人にとっては「描写の明晰性」が、古代ギリシア人にとって「天空の火」、換言すれば「聖なるパトス」がそうであるように、生来的な素質である。ホメーロスはこの「パトス」(情熱)を文学に形象化するために、「西欧的ユーノー的冷静さ」を、つまり彼にとって異質なものを自家薬籠中のものにして、高度な作品を完成した。ドイツ人にとっては、事態は逆となる。西欧のドイツ人は「パトス」を獲得しなければならぬのである。(以上、要約)⁽³⁹⁾

一方、悲歌『パンと葡萄酒』のヴァリエントは次のように歌っている。「すなわち、精神は初め／家に、源泉にはいない。故郷は憔悴させる。／^{コロニ}植民地を、果敢なる忘却を、精神は愛する。」⁽⁴⁰⁾。

以上二つのテキストを重要な典拠として、ハイデガーは『追想』を解釈していく。さて、『追想』論冒頭、彼は言う。性急に「素材的なもの」に固執することは、詩の解釈を誤らせる、と⁽⁴¹⁾。作品の背景や伝記的な細部への拘泥が、自立した世界としての芸術作品の理解にとって、場合によっては、妨害になることを自覚させた点で、解釈学が文学研究に与えた貢献は大きい。しかし、逆に、解釈を優先して、現実との関連性を希薄にするならば、芸術作品の理解に別の意味での障害が生まれることも否定できない。『追想』に関しては特に、この作品が詩人の南仏滞在という、言ってみれば決定的体験の上に成立しているだけに、「素材的なもの」こそ重要となる。ポルドー滞

在以後の詩群は、この「素材」を反映した語彙に満ちてくるからである。

『追想』は南仏ボルドーを流れるガロンヌ河に始まり（第一節）、ガロンヌ河に終わる（第五節）。ヘルダーリンが家庭教師をしていたマイヤー邸はその左岸にほど近かった⁽⁴²⁾。この河はボルドー市より上流では急に川幅が狭くなり、右岸にはアントル・ドゥ・メールの石灰岩の丘が続く。急峻な渓谷の岸边には果樹園、農家、水車小屋が立ち並ぶ。他方、ガロンヌ河はボルドー市よりも下流で北東から流れ来るドルドーニュ河と合流し、ジロンド河となり、広い河口から大西洋に注ぎ込む⁽⁴³⁾。『追想』は広やかに、そして美しく、その光景を描写する。

第一節冒頭、ヘルダーリンは帰国したドイツから南フランスへ「北東の風」*der Nordost* に託して挨拶を送る。それは「火の精神」を「船人」に約束すると言う。ガロンヌ河は大西洋に注ぎ込む。詩人の視線はおのずから海へ、船人へ向かう。広大で動きのあるこのイメージは、最終第五節の中で、ガロンヌ河がドルドーニュ河と合流して「広々と海へ」流れ出るイメージに繋がる。海はさらに、「インド人」のイメージを喚起する。

インドはインド＝ヨーロッパ語族の起源であり、西欧人にとっては遙かな原郷である。当時、ドイツにおいてはサンスクリット学が目覚ましい発展を遂げていた⁽⁴⁴⁾。ゲオルク・フォルスターは古代インドの叙事詩カーリ・ダーサ作『シャクンタラー姫』を（英訳から）独訳し（1791年）、ヘルダーリンがボルドーに滞在した1802年の夏には、フリードリヒ・シュレーゲルがパリに居を定めてサンスクリット学を学び、数年後、大著『インド人の言語と知恵について』*Über die Sprache und Weisheit der Inder*（1808年）を刊行する⁽⁴⁵⁾。ヘルダーリンも賛歌『ゲルマニア』*Germanien*の中で、西欧人に文明を伝えるためにインダス河畔を飛び立つ鷲を壮大に歌う⁽⁴⁶⁾。

『追想』第一節後半から第二節にかけて、詩人は彼の脳裏に刻まれた南仏の風景を、あたかも「画家」（第四節）が絵の具でそうするように、言葉で次々に描き出す。「ボルドーの庭々」「急峻な岸辺」「河流」「樫の木と白楊」「水車小屋」「楡の森」「農家」「無花果」、等々。季節は春である。彼は 1802 年 1 月末から同年 5 月中旬までボルドーに滞在した。ヨーロッパの農村では、厳しい冬が終わったあと、謝肉祭や五月祭で、春の訪れを盛大に祝う⁽⁴⁷⁾。第二節後半はこの春の祝祭を描く。詩人には珍しく、きわめて感性（官能）的に。「褐色の肌の女たち」「絹のごとき大地」「金色の夢」「眠りを誘うそよ風」。すべては南方特有の色彩と触感と温度に満ちている。

第三節前半もボルドーの思い出である。撞着語「暗い光」das dunkle Licht、「芳香を放つ杯」は、深紅色のボルドーワインが持つ独特の神秘と香りを彷彿させる⁽⁴⁸⁾。悲歌『パンと葡萄酒』と比べて、イメージは象徴性というよりは、感性（視覚、嗅覚、味覚）の度合いを強めている。後半のテーマも雰囲気は明るい。「会話」「愛の日々」「行われた行為」、それこそが「好ましい」gut と詩人は歌う。

第四節は一転して、孤独の世界である。前節後半はその布石だったと言える。ベラルミンはヘルダーリンの唯一の小説『ヒュペリオン』Hyperion の主人公の親友の名である。明るい思い出に浸っていた詩人は、突然、孤独な身辺を感じる。「会話」も「行われた行為」も今はなく、マストに帆はなく、町の祝祭も、音楽も舞踏もない。そしてこの第四節は、続く最後の節に現れる「海」のテーマを先取る。「富み」が始まるのは「海」das Meer だ、と。自然の幸^{さいち}、航海と貿易、文化の伝達と交流、あらゆる意味で海のもたらす「富み」は大きい。

第五節は第一節の海のテーマを反復する。「航海」「船人」のイメージは

「インド人」のそれと観念連合する。第四節の「マスト」もその一環である。「海」die See は「記憶」Gedächtnis を「奪い」nehmen かつ「与える」geben。

ハイデガーはこの一節をこう解釈する、海へ船出する時、人は故郷を忘れ、異国に想いを馳せなければならない。海は故郷への追想を「奪う」ことによって、同時にその富みを「与える」と⁽⁴⁹⁾。ベーレンドルフ宛書簡と『パンと葡萄酒』異文に見られる「祖国」と「植民地」、「固有なもの」と「異質なもの」、「聖なるパトス」と「西欧的冷静さ」の対比とその総合の試みを、哲学者はここに読み取っている⁽⁵⁰⁾。海は確かに、これらすべての要素を、寄せては返す波の反復運動の中で、関係させる自然に他ならない。

それにしても、『追想』は、それまでのヘルダーリンの詩作品と比べた場合、異質な何かを読者に感じさせる。風にしろ、海にしろ、南国の女たちにしろ、『ライン河』（1801年）や『ゲルマニア』（同）等の「祖国と時代」を謳う⁽⁵¹⁾ いわゆる後期賛歌の硬質な輝きに代わって、温暖で明るい空間が、読者の眼前にさわやかに広がっていくかのようなようである。ボルドー滞在は、間違いなく、詩人の意識に何か決定的な変化をもたらしている。それを検証するために、われわれは『追想』と同時期に書かれた一連の賛歌断片に目を向けることにしたい。

3 賛歌断片

南仏滞在およびそれ以後の数年間に、ヘルダーリンは多くの詩を未完のままノートに書きとめた（「ホンブルク二つ折^{フオリオ}り版」⁽⁵²⁾）。そこには、それ以前の作品には決して、あるいは殆ど見られなかったイメージやモチーフやテー

マが、仕上げを待つかのようにメモされている。断片ながらも、それらの詩はある種の世界を予感させ、それ自体で大いに魅力的でもあるが、他方、ヘルダーリンの創作時期の諸段階を画定するためにも、欠かせない資料を提供している。語彙に注意しながら、それらを数篇紹介してみたい。

* 『巨人族』 Die Titanen (以下はすべて部分的引用)

「多くの者が死んだ／古い時代には將軍／麗しい女性、詩人が／そして近代には／男子の多くが／私はしかし一人。／…／こうして大洋を船で行き／芳香を放つ島々に尋ねる／彼らは何処^{いずこ}へ行ったのかと。」⁽⁵³⁾

『追想』第四節の孤独（「何処^{いずこ}へいったのか、友らは？」）がここにも歌われている。詩人は「大洋を船で行き」、「芳香を放つ島々」に行方を尋ねる。大洋、船、島という海のイメージ群と感性に関わる分詞（「芳香を放つ」）は『追想』と同類である。『巨人族』の他の箇所には「荒野」、「富み」、「天空の火」といったこの時期に特有の語彙も見られる。

* 『最も身近なもの』 Das nächste Beste 「第三稿」。

「だが私が望むものが来る、／椋鳥のように／喜びの叫び声をあげて、ガスコーニュ、多くの庭園がある場所／オリーブの国、そして／麗しい異国で、／草の茂る道の辺の噴水を／荒野の中、人知れず木々を／太陽が照らすとき、／そして大地の心臓が／開くとき、／檜の木の丘の回り／燃える国土から／河は流れる、／日曜日には舞踏^{さなわ}の最中／家々の敷居で人は歓待される／花冠で飾られた街路を、静かに歩むときに。／彼ら（鳥たち）は故郷を感じる、／…／シャラント川の湿った草原で、／…／大気が道を開き、／彼らの目を／北東の風が鋭く吹きつけて目覚ますとき、彼らは飛

び立っていく、／隅から隅を求めて／より好ましきものを目にしながら／
なぜなら、彼らは最も身近なものをいつも精確に捉えるから。』⁽⁵⁴⁾

「庭園」「噴水」「舞踏」「街路」等々、これらのイメージは、固有名詞「ガスコーニュ」（ガロンヌ河の南の地域）と「シャラント川」（ジロンド河の北方に注ぐ川）、そして「オリーブの国」のイメージと融合しながら、南フランスの風景を読者の眼の前に描き出す。『追想』冒頭の「北東の風」がここでも吹いて、南方で冬を過ごした「椋鳥」の目を北方へと目覚めさせる。視界はボルドーを含む周辺一円に広がる。

* 『すなわち深き淵から…』 Vom Abgrund nemlich...

「町の真新しい姿、そこでは／鼻が痛むほどに／レモンとプロヴァンス産のオリーブ油の香りが立ち上る、私は／感謝する、ガスコーニュの土地土地に。」⁽⁵⁵⁾

「レモン」「オリーブ油」、 「プロヴァンス」そして「ガスコーニュ」。ここでは南国の果樹の強烈な香りが感覚を刺激する。

* 『コロンブス』 Kolomb

「私が英雄の一人にであることを願ひ／それを自由に…告白してよいのなら／それは海の英雄だ。／…／名を挙げるとしたら／アンソンとガマ／…／私はジェノヴァに行き／コロンブスの家を訪ねたい／そこで彼は／…／多くの美しい／島々があって、／…／リスボン」⁽⁵⁶⁾

余白の多い断片であるが、詩人はここで『追想』が予感した海の世界に想いを馳せる。十八世紀イギリスの提督ジョージ・アンソン、大航海時代のポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマ、そしてイタリア人コロンブス。何か新しい

詩空間をヘルダーリンは切り開こうとしているかのようである。

*最後に、『テニアン』 Tinian

「甘美だ、彷徨い歩くのは／聖なる荒野の中を、／…／春、神聖な森の
暖かい大地に／翼ある異国の者が／…／孤独に休息する／枝の主日の植物
は／芳香を放ち／夏の鳥とともに／蜜蜂が来る」⁽⁵⁷⁾

「渡り鳥」(「翼ある異国の者」)、「蜜蜂」、聖なる「荒野」と「森」。テニアンは西太平洋のマリアナ諸島の一つ、前述アンソンの航海で発見されて以来有名になった。ここでも季節は春、枝の主日(復活祭直前の日曜日のカトリック祝祭日)である。

以上の賛歌断片群からは、当時ヘルダーリンが抱いていたであろう想念の数々が、ある時は微かに、またある時はくっきりと浮かび上がってくる。ボルドー周辺の名の地名や河の名が詩人の記憶の底から鮮やかに甦る。普通名詞、レモン、オリーブ等は南方的風土を彷彿とさせる。ガロンヌ河がドルドーニュ河と合流して注ぎ込む大西洋の遙か彼方へ、詩人の眼差しは広がっていく。大航海時代に発見された大陸や島々、鬱蒼とした森と荒野、暑気と芳香、渡り鳥、蜜蜂、遙かな世界のイメージが次から次に彼の脳裏に去来する。

ヘルダーリンの創作活動に重大な転機が訪れたとすれば、それは、『追想』や賛歌断片が証言しているように、また G・ミートが指摘するように⁽⁵⁸⁾、ボルドー滞在を起点としているのかも知れない。われわれは次に、1802 年を分岐点として、ヘルダーリンの作品を、語彙分析の面から再検討してみたい。

4 風、鳥そして海

『追想』と賛歌断片はすべて、ヘルダーリンがボルドーから帰国した後、1803年から1805年の間に執筆されたと見られる⁽⁶⁰⁾。語彙に注意してこれらの作品を読むと、いくつかの特徴が見えてくる。

風

『追想』の冒頭。

「北東の風が吹く、／風の中でも私には最も好ましい風が」

ヘルダーリンの作品の中で、「北東の風」der Nordostが歌われるのは、この箇所と『最も身近なもの』だけである⁽⁶⁰⁾。「風」der Windは1800年以前の詩には4回、以後は12回用いられている。特に後者では印象的なものが多い。『生の半ば』Hälfte des Lebens (1802/03年)の最後の一節。「壁は言葉もなく／冷たく、立ち尽くし、風の中で／旗はかたかたと音を立てる」。季節は冬、「花」も「陽光」もない荒涼とした光景を風は強く刻印する⁽⁶¹⁾。『母なる大地に』Der Mutter Erde (1800年)では「北風」が歌われる。「神殿の柱は立ち並ぶ／苦難の日々、見捨てられて、／北風が^{こだま}響する／…広間の奥深くに」⁽⁶²⁾。神殿の廃墟を北風が吹き抜け、^{ひとけ}人氣ない広間はいよいよその寂しさを増す。

『追想』の北東風は、遙か南西に位置する南仏ボルドーに祖国ドイツから挨拶を送ろうとする詩人にとって、「最も好ましい風」と呼ばれる。続きはこうである。

「なぜなら、それは火の精神を／よき航海を船人に約束してくれるから」⁽⁶³⁾。

「火の精神」は詩人のベーレンドルフ宛書簡の「力強い元素」das gewaltige

Element, 「天空の火」 das Feuer des Himmels, あるいは「聖なるパトス」 das heilige Pathos⁽⁶⁴⁾ を想起させる。書簡でそれは「西欧的ユーノー的冷静さ」と対比される。ヘルダーリンにとって、自己形成に必須不可欠のもの、憧憬の的である。注意すべきは、詩の中でそれが海という空間、船人という英雄（賛歌断片『コロンブス』）と関連づけられていることだ。詩人の視線は、賛歌断片でも見たように、この頃、海の彼方に熱く注がれていた。

「北東の風」に、もう一つ作品『最も身近なもの』（第三稿）はこう呼びかける。

「そして鋭く吹きつけて、彼ら（鳥たち）の目を北東の風が覚ますと、彼らは飛び立っていく」⁽⁶⁵⁾。

「彼ら」 sie は同じ節（第二節）の中では「鳥たち」 Vögel を指すが、第一節では具体的にこう歌われる。「それゆえ、椋鳥のように／喜びの叫び声をあげて／ガスコーニュ、多くの庭園のある場所、／オリーヴの国…」⁽⁶⁶⁾。この詩節の直前には、「だが私が望むものは来る」という一句があり⁽⁶⁷⁾、同詩「第一稿」には、「よき時間は多くのことを成し遂げる」⁽⁶⁸⁾ とある。詩人が希望するものが到来し、多くのことが達成されるよき時を生み出す場所、ガスコーニュは、フランス南西部に位置する。北東の風が「椋鳥」 die Staaren の目を覚ますと、南国に滞在していたこの渡り鳥は一路、北東の方角にある故郷へ旅立っていく。風が空間を移動する自然現象であるように、渡り鳥も季節ごとに大きく空間を移動する。われわれはここで風から鳥へ視点を移したい。

鳥

ヘルダーリンが詩の中で歌った鳥の種類と頻度はそれほど多くない。鴉

Rabe は草案を含めて 3 回、鷄 Hahn は 2 回、鳩 Taube は 1 回、鷹 Falke は 3 回、そして鶴 Kranich も 3 回である。白鳥 Schwan はやや多く 5 回姿を現す。『生の半ば』第一節のイメージは殊に印象的である。ただ一種、詩の中に例外的に多く姿を見せるのは鷲 Adler である。1800 年以前には 9 回、そして以後は 20 回近い。頻度を見ただけでも、詩人の文学空間の特徴が推察できるが、鷲が作品の中で果たす役割も、実際、きわめて重い。賛歌『パトモス』Patmos (1802 / 03 年) 冒頭の情景は格別に勇壮である。ここでは断片詩『鷲』Der Adler (1803 / 05 年) の一節を引用してみる。「原初／インダス河の強い香りを放つ／森の中から／父母らはやって来た」⁶⁹⁾。ここに言う父母らは鷲のそれである。

『ゲルマニア』Germanien (1801 年) 第三節でも、インダス河を飛び立った鷲が、神々の言葉を伝えようと、パルナソス山の雪の峰を越え、イタリアの犠牲の丘を越えて、最後にアルプスを飛び越し、ゲルマンの土地に到来する様子が壮大に歌われる⁷⁰⁾。西欧文明の遠い祖先の地インド、そして古代ギリシアとローマは、ドイツの詩人にとっては、己を育ててくれた精神の故郷である。鷲は、ギリシア神話において主神ゼウスの使者であるように、ここでも、神々の音信を運んで来る使者の役割を演じる。

ピンドロス風賛歌の勇壮な鷲に比べて、『最も身近なもの』の中の椋鳥は、文字通り、人間にとってより身近な存在である。大自然の只中に棲む猛禽の鷲とは異なり、スズメ目ムクドリ科の椋鳥は、全長 30 センチメートル程度の、林や人家や公園を好んで棲み家とする日常的な鳥である。世界に広く分布し、多くは留鳥である椋鳥は、高緯度では渡り鳥となって、南北に移動すると言われる⁷¹⁾。『最も身近なもの』の中でも、それは渡り鳥のイメージで描かれている。

『最も身近なもの』の中の椋鳥は、オリーブの国、南仏の「灼熱の国」ガスコーニュで、北東の風に目を覚まされて、「故郷を感じる」（第1節）。そして「最も身近なもの」を次々に感知しながら、南から北へ、すなわち詩人のいるドイツへ渡って来る（第2節）。『追想』の北東風が、帰国した詩人の音信を、ドイツから遙か南西のポルドーに運んで行くように、『最も身近なもの』の椋鳥は、北東の風に誘われて、今度は逆に、南西から北東を目指して飛び立って行く。渡り鳥は風を利用して空間移動をする。昼には土地土地の目印や太陽を目安に、また夜は月や星、そして雲天の際には磁場を指針として⁷²⁾。詩『最も身近なもの』における空間表象は、鳥のこの習性を見事に捉えている。

北東の風も椋鳥も、『追想』と『最も身近なもの』に登場するだけで、他には用例がない。生涯に、頌歌、^{ホーデ}悲歌、^{エシギ}賛歌等々、様々なジャンルの詩と断片を残したヘルダーリンは、1803年から1805年、すなわち、南仏から帰郷して直後の数年以内に、これら二つの作品でのみ、（北東）風と（椋）鳥を歌ったことになる。換言すると、ポルドー滞在を転機として、詩人には、それまでとは異なる空間表象が芽生えていたのである。

雄大さを言うのなら、1801年までの、いわゆる後期賛歌にそのイメージは確かに結実している。しかし、それとは異なる、何か開かれた、具象的で感性的なものが、南仏体験後、彼の作品には感じられるのである。「海」の場合もそうだ。

海

ドイツの内陸部、シュヴァーベン地方に生まれ育ったヘルダーリンは、ポルドーに行くまで本物の海を見たことがなかった。ドイツも北に北海 der

Nordsee やバルト海 der Ostsee がある。しかし詩人はライン河中流域よりも北へは、生涯、足を伸ばしてはいない。南仏滞在は海との出会いという意味でも、彼には忘れ難い思い出を残したのである。

周知のように、ドイツ語には「海」を意味する言葉が二種類ある。中性名詞 das Meer と女性名詞 die Seeである。後者には同じ綴りで、男性名詞 der See もあり、これは湖を意味する。Meer (中世ドイツ語 mer) は、ラテン語 mare を語源とするラテン系言語である。本来は「内陸湖」Binnensee を意味し、例えばドイツ語で地中海は das Mittelmeer と言う。一方、See (中世ドイツ語 se) はゲルマン系言語で、やはり内陸湖、湿地あるいは海を意味し、英語の sea と同系の言葉である。語源は不明のようだ。Meer および See (内陸湖) に対して、大洋を意味するドイツ語 (男性名詞) der Ozean の語源は、ギリシア語 okeanos オケアノスに遡り、これは「世界の海」Weltmeer の意である⁽⁷³⁾。

語彙分布によってヘルダーリンの「海」を調べると、その特色が明瞭になる。das Meer は 1800 年以前、以後、いずれも使用頻度が多く、特に複合語に用いられる。例えば、「海の岸辺」Meeresküste (『海の岸辺が…』Wie Meeresküsten...), 「海の風」Meerluft (『ネッカー川』Der Neckar), 「海の潮」Meersflut (『宥和する者よ…』Versöhnender...), 「海の水」Meereswasser (『パトモス』), さらに「広々と海へ」meerbreit (『追想』) 等々である⁽⁷⁴⁾。

die See は 1800 年以前の詩で 2 回用いられているのに対して、以後は 7 回である。しかも、『追想』執筆のボルドー時代にそれは集中している。『ムネーモシュネー』第 1, 2, 3 稿, 『鷺』, 『最も身近なもの』である。複合語は「海の英雄」Seeheld (『コロンブス』) 一例のみである。

南フランスの思い出を描く『追想』は、今読み返してみると、潮騒の音をいわば通奏低音としていることが分かる。北東の風が約束する「よき航海」と「船人」(第1節)に始まるこの詩では、しばらくボルドー風景を辿ったあと(第1, 2節)、後半、ふたたび(富みの始まる)「海」、(帆のない)「マスト」(第4節)、そして(風吹く)「岬」と(記憶を奪い、与える)「海」(第5節)といった具合に、「海」die See のモチーフが次々に繰り広げられ、詩人の意識の底には明らかに潮騒の遠い音が鳴り響いている。

『追想』と同じ頃にかきとめられた一群の賛歌断片にも、海のイメージは頻出する。『海の岸辺が…』、『巨人族』、『だが天上の者たちが…』Wenn aber die Himmlischen, 『鷺』、『最も身近なもの』、『テニアン』、『コロンプス』がそうである。

最後の二篇は、その題名だけですでに、ヨーロッパを遠く離れた海洋を連想させる。『追想』にも「航海」のモチーフは見られるが、ヘルダーリンの視界に大航海時代の「海の英雄」が登場してきたのは作家ヴィルヘルム・ハインゼの影響のようである⁽⁷⁵⁾。

1746年生まれ、ヴィルヘルム・ハインゼは、ゲーテより三歳年上で、イエーナで法学、文学、哲学を研究した後、ゲーテに先駆け、1780年6月から1783年9月までイタリア各地を旅行、1787年にルネサンス期イタリアを舞台にした芸術家小説『アルディングロと至福の島々』Ardinghello und die glückseligen Inseln を刊行して一躍有名になった。そして1796年、ジュルダン将軍率いるフランス革命軍を逃れて、交友のあったズゼッテ・ゴントルト(ディオティマ)と彼女の恋人ヘルダーリンを伴い、ドリブルク温泉に滞在する⁽⁷⁶⁾。ヘルダーリンは悲歌『パンと葡萄酒』Brod und Wein をこの先輩作家に献じた。後者はしかし、1803年6月、前者がボルドーからドイツに帰

国してから一年目に死去する。

『アルディングロ』に次のような一節がある。「ジェノヴァ、昔から海を支配するべくその住民を駆り立て、最も偉大な海の英雄を輩出してきたこの町の姿を私は眺めた。聖なるコロンブス、そしてアンドレア・ドリリア…／世界でこれほど魂を力強く満たすものはない。海こそこの世に存在する最も美しきものである」⁷⁷。

コロンブス（1446 頃-1506 年）はジェノヴァ出身の航海者でアメリカの発見者、ドリリア（1468-1560 年）も同じくジェノヴァ出身の提督で、同市の「解放者」と呼ばれる人物である。ハインゼの小説『アルディングロ』の中で讃えられる「最も偉大な海の英雄」die größten Seehelden はコロンブスとドリリアである。ヘルダーリンは賛歌断片『コロンブス』の中で、「海の英雄」ein Seeheld として、イギリスの提督ジョージ・アンソン（テニアン島の発見者）とポルトガル人でインド航路の発見者ヴァスコ・ダ・ガマの名を挙げる。そして、ジェノヴァではコロンブスの家を訪れたい、と歌う（第 3 章「賛歌断片」参照）。敬愛するハインゼの小説の中から、詩人は、ボルドーでの海の体験に触発されて、「海の英雄」のモチーフを継承したにちがいない。

いずれにしても、ヘルダーリンにとって、南フランスで見た大西洋の雄大な眺めは、生まれて初めての経験ゆえに、強く記憶に刻み込まれたであろう。彼の詩想に、海は間違いなく新たな空間を開いたのである⁷⁸。『追想』の行間に絶えず鳴り響く潮騒の音は、賛歌断片のあちこちにその余韻を伝えている。

ボルドー滞在は、風の方角、鳥の移動、海の印象、といった新鮮な感覚をヘルダーリンの意識の奥深くに覚醒させ、彼の創作活動に新機軸をもたらした

た。風、鳥そして海は、南仏の貴重な賜物に他ならない。

エピローグ

祖国ドイツを遠く離れて敢行されたヘルダーリンのボルドー紀行は、詩人の視界を広く世界に開いた。そして「アポロンに撃たれた」この体験は、彼の作品の随所に、何か強烈なもの、燃えるようなものを刻印した。前章まで試みた、風、鳥そして海のモチーフは、南方体験が恵んでくれた要素の中の数例にすぎない。1802年夏以降のヘルダーリンの詩には、それまでには殆ど予想もできなかった言葉が頻出する。

数例のみ挙げよう。「香り」がそうである。「香りを放つ島々」die duftenden Inseln (『巨人族』)、「強い香りを放つ」starkduftend (インダス河の森) (『鷺』)、「花の香りを放ちながら」blühenduftend (『最も身近なもの』第3稿)等々。「火」も、ベーレンドルフ宛書簡の「天空の火」を明らかに反映して、この頃の作品には目立って多い。火に関連して、動詞「燃える」brennenも多用される。1800年以前には用例のなかった「暑気」(=火災) Brand は、ボルドー以後集中して現れる (『すなわち深き淵から…』, 『ヴァティカン』等)⁽⁷⁹⁾。

南方的なものは人間の感性を強烈に刺激する、香りも熱気も色彩も。先に見た南フランスの果物、オリーブ、レモン、無花果もそうだが、ヘルダーリンの詩想は、ボルドーから、遙か海の彼方へ飛翔して、インダス河畔や南の島(テニアン)に、感性の赴くままに、原始の自然の活力を求めて彷徨する。風、鳥そして海だけでなく、他にも、様々なテーマやモチーフ群が、晩年の彼の作品を彩っていく。

最後に、ハイデガーとアドルノのヘルダーリン論に一言して本論を締めくくりたい。ハイデガーは『追想』論の中で、悲歌『パンと葡萄酒』^{ヴァリアント}の「植民地を、そして勇敢な忘却を精神は愛する」に関してこう語る。「植民地とは、母国への帰還を命じる娘の国のことである。精神はそのような本質をもつ国を愛することによって、間接的に、そして隠れて、ただ母だけを愛する」。また、『追想』第二節の「褐色の肌の女たち」について、彼は、詩『ドイツの歌』*Gesang des Deutschen* を引用しながら、「女たち」*die Frauen* には「女主人や女性の保護者を意味する初期の響き」があるとする⁽⁸⁰⁾。

この論文から二十年後の1963年、フランクフルト学派のテオドーア・W・アドルノは衝撃的なヘルダーリン論（『パラタクシス』⁽⁸¹⁾）を発表する。ハイデガーの前者の解釈を、アドルノは「同族結婚の理想」と呼び、こう続ける。「ヘルダーリンの〈勇敢な忘却を精神は愛する〉という詩句を、ハイデガーはく根源を愛する隠された愛へと改変」している、と。また後者に関してアドルノはこう批判する、「決して裏付けできないこの主張によって、ハイデガーは、気づかれないうちに、ドイツの女たちと彼女らへの賞賛へ話題を移している」。「褐色の肌の女たち」に、アドルノはむしろ、ごく自然に、「南方の女性のエロティックなイマージ」を見るのである⁽⁸²⁾。

ハイデガーの『追想』論がナチス政権末期の1943年にフライブルク大学での講義（1941 / 42年）を基に発表されていること、ユダヤ系であったアドルノが、ナチス政権によって教授資格を剥奪されて、1937年、アメリカに亡命し、第二次世界大戦後の1949年ようやく祖国ドイツに帰国し、フランクフルト大学教授に就任したこと（その間、アドルノの親友ベンヤミンはナチスからの亡命途上、1940年、ピレネー山中で服毒自殺した）、こうした歴史的事実や思想的立場を差し引いても、ハイデガーのヘルダーリン解釈には問

題点が少なくない。彼はその『追想』論の中で「素材的なもの」に警告を発したが、本稿では逆に、詩人が生まれて初めて体験した南方的風土を重視した。語彙分析からも明らかなように、この体験は以後の彼の詩作活動に決定的な痕跡を残したからである。

しかし、それにしても、ハイデガーが『追想』にいち早く着目した功績を過小評価してはならない。ヘルダーリンの作品のもつ独特の魅力と深さを、研究者はこの哲学者のお陰で再認識できたからである⁽⁸²⁾。他方、ベンヤミンもペーレンドルフ宛書簡の重要性に早くから気づき、そこにヘルダーリン後期の詩空間の質的变化を予感した。ポルドー紀行を転機として、彼の作品には確かに、それまでとは異なる何かが現れ、その詩空間は、感性的なものを媒介に、いよいよその陰影を増していった。本稿ではその様子を、『追想』と賛歌断片を中心に考察してきた。ヘルダーリンのポルドー紀行は、旅がいかに多くを人にもたらしめてくれるかを示す格好の例である。

(＊本稿は、2003年度成城大学特別研究助成金による成果の一部である。)

テキスト

- * Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe, begonnen durch Norbert v. Hellingrath, fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot, 2. Aufl., 6 Bde., Propyläen-Verlag, Berlin, 1923.
- * Hölderlin, Sämtliche Werke, hg.von Friedrich Beißner, Adolf Beck und Ute Oelmann, 8 Bde., W.Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1943-85. (Große Stuttgarter Ausgabe) (GSA 版)
- * Hölderlin, Sämtliche Werke und Briefe, hg.von Jochen Schmidt, 3 Bde., Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M., 1992-1994. (DK 版)

【註】

- (1) Friedrich Nietzsche, *Unzeitgemäße Betrachtungen*, in; *Werke in 3 Bdn.* (Schlechta) Carl Hanser Verlag, München, Bd.3, 1966.／邦訳「ニーチェ全集」4『反時代的考察』, 小倉志祥訳, ちくま学芸文庫, 1993年。
- (2) Wilhelm Dilthey, *Das Erlebnis und die Dichtung*, 14.Aufl., Vandenhoeck & Ruprecht Verlag, Göttingen, 1965.
- (3) Martin Heidegger, *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*, 3.Aufl. Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M., 1963.／邦訳, マルティン・ハイデッガー『ヘルダーリンの詩の解明』, 手塚富雄, 斉藤信治, 土田貞夫, 竹内豊治訳, 理想社「ハイデッガー選集 III」, 昭和 41 (37) 年。
- (4) カール・ヤスパース『ストリンドベリとヴァン・ゴッホ』『スウェーデンボリ及びヘルデルリンとの比較例証による病歴誌的分析の試み』, 藤田赤二訳, 理想社「ヤスパース選集 36」, 1980年。
- (5) Walter Benjamin, *Deutsche Menschen*, in; *Gesammelte Schriften IV・I*, hg.von Tillman Rexroth, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1972.／邦訳, ヴァルター・ベンヤミン『ドイツの人びと』, 丘沢静也訳, 晶文社, 1992 (84) 年。
- (6) Thodor W.Adorno, *Parataxis*, in; *Noten zur Literatur*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1981.／邦訳, テオドール・W・アドルノ『パラタクシス』, 高木昌史訳, 「批評空間」1992, No.5 所収, 福武書店, 1992年。
- (7) Michel Foucault, *Das unendliche Sprechen / Aktaions Prosa*, in; *Schriften zur Literatur*, übersetzt von Karin von Hofer, Nymphenburger Verlagshandlung, München, 1974.／ミシェル・フーコー『「父親」の〈否定〉』, 東宏治訳, 「エピステーメー」II 『ミシェル・フーコー』所収, 朝日出版社, 昭和 59 年。
- (8) ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』(下)「VI 息を吹き入れられたことば」, 梶谷温子, 野村英夫, 三好郁朗, 若桑毅, 阪上侑訳, 法政大学出版局, 1985 (83) 年。
- (9) Hölderlin, *Eine Chronik in Text und Bild*, hg.von Adolf Beck und Paul Raabe, Insel Verlag, Frankfurt a.M., 1970.
- (10) Martin Heidegger, *Hölderlins Hymnen >Germanien< und >Der Rhein<*, Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M., 1980, Gesamtausgabe, Bd.39.／邦訳, ハイデッガー『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と

- 「ライン」], 木下康光, トレチアック訳, 「ハイデッガー全集」39, 創文社, 1988 (86) 年。
- (11) Martin Heidegger, Hölderlins Hymne >Andenken<, Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M., 1982, Gesamtausgabe, Bd.52./邦訳, ハイデッガー『ヘルダーリンの讃歌「回想」], 三木正之, トレチアック訳, 「ハイデッガー全集」52, 創文社, 1989年。
- (12) Martin Heidegger, Hölderlins Hymne >Der Ister<, Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M., 1984, Gesamtausgabe, Bd.53./邦訳, ハイデッガー『ヘルダーリンの讃歌「イスター」], 三木正之, トレチアック訳, 「ハイデッガー全集」53, 創文社, 昭和62年。
- (13) 註(3) 参照。
- (14) 「テキスト」参照。
- (15) In; Walter Benjamin, Illuminationen, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1969.
- (16) 註(5) 参照。
- (17) 「中間休止」Zäsur は, 詩学/音楽で用いる概念で, ヘルダーリンはソポクレスの悲劇の構造分析にキーワードとして用いた。ここでは「区切り」を意味する。
- (18) Günter Mieth, Hölderlins Frankreich-Aufenthalt im Jahre 1802 als >Totalerfahrung< und als eine entscheidende Voraussetzung für sein Spätwerk, in; Hölderlin-Jahrbuch, Bd.23., 1982/83, J.C.B.Mohr, Tübingen, 1983.
- (19) 註(9) および Johann Kreuzer (Hrsg.), Hölderlin Handbuch, J.B.Metzler Verlag, Stuttgart/Weimar, 2002, S.45-50.
- (20) GSA, Bd.6, S.432f.
- (21) ベーレンドルフ宛書簡については次を参照。Peter Szondi, Hölderlin-Studien, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1967.
- (22) 註(5) 参照。
- (23) GSA, Bd.6, S.425-428.
- (24) Ernst Robert Curtius, Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter, 8.Aufl., Francke Verlag, Bern und München, 1973 (48). Kapitel 10, Die Ideallandschaft, S.195f.
- (25) Pierre Bertaux, Hölderlin in und nach Bordeaux, in; Hölderlin-

- Jahrbuch, Bd. 19/20, 1975-77, J.C.B.Mohr, Tübingen, S.105.
- (26) DK 版, Bd.3, S.919f.
- (27) ホメーロス『イーリアス』下, 呉茂一訳, 岩波文庫, 昭和 44 (33) 年, 53 頁。
- (28) 『オイディプス王』と『アンティゴネー』がヘルダーリンの注釈付きで 1804 年刊行された。GSA 版, Bd.5, DK 版, Bd.2 所収。
- (29) ソポクレス『オイディプス王』, 藤沢令夫訳, 岩波文庫, 昭和 44 (42) 年, 100 頁。
- (30) GSA 版, Bd.7-2, S.195.
- (31) Adolf Beck, Eine Personalbeschreibung von Hölderlin und die Wege nach Bordeaux, in; Hölderlin-Jahrbuch, Bd.10, 1957. および註 (25) 参照。
- (32) GSA 版, Bd.6, S.429f.
- (33) 註 (19) Hölderlin Handbuch, S.45-50.
- (34) W.Waiblinger, Hölderlins Leben, Dichtung, Wahnsinn,in; DK 版, Bd.3, S.707.
- (35) GSA 版, Bd.7-2, S.195, 199.
- (36) GSA 版, Bd.2, S.188f.
- (37) 註 (11) 参照。
- (38) 註 (3) 参照。
- (39) GSA 版, Bd.6, S.425-428.
- (40) DK 版, Bd.1, S.747.
- (41) 註 (3) S.78, 邦訳 127 頁。
- (42) Hölderlin Handbuch, S.47.
- (43) 註 (42), アシェット『フランス完全ガイドブック』, 講談社, 昭和 62 年。
- (44) 拙稿『F・シュレーゲルのフランス紀行』, 「ヨーロッパ文化研究」第 22 集, 成城大学大学院文学研究科, 2003 年所収。
- (45) 註 (44) 参照。
- (46) GSA 版, Bd.2, S.149-152.
- (47) ヴァラニヤック『ヨーロッパの庶民生活と伝承』, 蔵持不三也訳, 白水社 1990 (80) 年, 植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』, 講談社学術文庫, 1999 年。
- (48) DK 版, Bd.1, S.1022.

- (49) 註 (3), S.134, 邦訳 214 頁。
- (50) 註 (49) 参照。
- (51) GSA 版, Bd.2, S.680f.
- (52) Hölderlin Handbuch, S.379-394.
- (53) GSA 版, Bd.2, S.217-219.
- (54) GSA 版, Bd.2, S.237-239.
- (55) GSA 版, Bd.2, S.250f.
- (56) GSA 版, Bd.2, S.242-245.
- (57) GSA 版, Bd.2, S.240f.
- (58) 註 (18) 参照。
- (59) DK 版, Bd.1, S.1128f.
- (60) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin, 1.Teil: Die Gedichte, Bearbeitet von Heinz-Martin Dannhauer, Hans Otto Horch und Klaus Schuffels, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1983. (Wörterbuch), S.499.
- (61) GSA 版, Bd.2, S.117.
- (62) GSA 版, Bd.2, S.123-125.
- (63) GSA 版, Bd.2, S.188.
- (64) GSA 版, Bd.6, S.426.
- (65) GSA 版, Bd.2, S.238.
- (66) GSA 版, Bd.2, S.237.
- (67) 同。
- (68) GSA 版, Bd.2, S.233.
- (69) GSA 版, Bd.2, S.229f.
- (70) GSA 版, Bd.2, S.149-152.
- (71) dtv-Brockhaus-Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982, Bd.19, S.208. (Vogelzug)
- (72) dtv-Brockhaus-Lexikon, Bd.17, S.225f. (Stare)
- (73) Der Große Duden, Bd.7, Etymologie, Dudenverlag, Mannheim, 1963.
- (74) Wörterbuch, S.454f.
- (75) Hölderlin Handbuch, S.86-89.
- (76) 註 (9) 参照。
- (77) Wilhelm Heinse, Ardinghello und die glückseligen Inseln, hrsg.von Max L. Baeumer, Philipp Reclam jung. Stuttgart,, 1975, S.88.

- (78) ヘルダーリンにおける「海」については次を参照。Werner Kirchner, Hölderlin und das Meer, in; Hölderlin, Aufsätze zu seiner Homburger Zeit, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1967, S.34-56.
- (79) Wörterbuch, 78f., 80, 112.
- (80) 註 (3), S.101, 邦訳 163 頁。
- (81) 註 (6) 参照。Hölderlin Handbuch, S.440f.
- (82) Hölderlin Handbuch, S.432-438.

付録 (「追想」原詩)

ANDENKEN

Der Nordost wehet,
 Der liebste unter den Winden
 Mir, weil er feurigen Geist
 Und gute Fahrt verheißet den Schiffern.
 Geh aber nen und grüße 5
 Die schöne Geronne,
 Und die Gärten von Bourdeaux
 Dort, wo am scharfen Ufer
 Hingehet der Steg und in den Strom
 Tief fällt der Bach, darüber aber 10
 Hinschaut ein edel Paar
 Von Eichen und Silberpappeln;

 Noch denket das mir wohl und wie
 Die breiten Gipfel neiget
 Der Ulmwald, über die Mühl', 15
 Im Hofe aber wächst ein Feigenbaum.
 An Feiertagen gehn
 Die braunen Frauen daselbt
 Auf seidnen Boden,

Zur Märzzeit, 20
 Wenn gleich ist Nacht und Tag,
 Und über langsamen Stegen,
 Von goldenen Träumen schwer,
 Einwiegende Lüfte ziehen.

Es reiche aber, 25
 Des dunkeln Lichtes voll,
 Mir einer den duftenden Becher,
 Damit ich ruhen möge; denn süß
 Wär' unter Schatten der Schlummer.

Nicht ist es gut, 30
 Seellos von sterblichen
 Gedanken zu seyn. Doch gut
 Ist ein Gespräch und zu sagen
 Des Herzens Meinung, zu hören viel
 Von Tagen der Lieb', 35
 Und Thaten, welche geschehen.

Wo aber sind die Freunde? Bellarmin
 Mit dem Gefährten? Mancher
 Trägt Scheue, an die Quelle zu gehn;
 Es beginnet nemlich der Reichtum 40
 Im Meere. Sie,
 Wie Mahler, bringen zusammen
 Das Schöne der Erd' und verschmähn
 Den geflügelten Krieg nicht, und
 Zu wohnen einsam, jahlang, unter 45
 Dem entlaubten Mast, wo nicht die Nacht durchglänzen
 Die Feietage der Stadt,
 Und Saitenspiel und eingeborener Tanz nicht.

Nun aber sind zu Indiern
Die Männer gegangen, 50
Dort an der luftigen Spiz'
An Traubenbergen, wo herab
Die Dordogne kommt,
Und zusammen mit der prächt' gen
Garonne meerbreit 55
Ausgeheth der Strom. Es nehmet aber
Und giebt Gedächtniß die See,
Und die Lieb' auch heftet fleißig die Augen,
Was bleibet aber, stiften die Dichter.

(GSA 版, Bd. 2, S.188f.)